

暑かった夏の終わりの気配がする今日この頃ですが、皆さんの夏バテの程度はいかがでしょう。我が家のガラス窓でお腹を冷やしているヤモリの一家も今年は元気がないようです。

何時の頃からか私はヤモリに興味を持ち始め、今では玄関周りや塀にへばり付いている姿が愛らしく思えます。図鑑でヤモリの寿命を調べてみたところ、十年以上と長いようです。今、我が家で見かけるヤモリ一家の長老とはかなり長いお付き合いなのかもしれません。

2020年オリンピック開催決定

ところで、東京オリンピックが正式に決まりました。前回の昭和39年の東京オリンピックのことは、子供心に鮮明に覚えています。新宿の地にはまだ敗戦後の雰囲気が残っていましたが、日本が経済復興しつつある雰囲気や社会の活気が伝わり、ウキウキしていた自分を思い出します。

価値観が多様化し、オリンピックを東京で開催する事にあまり興味が無い方もいらっしゃると思いますが、世界中の人が集まる世紀のスポーツ祭典を私は応援したいと思います。



今年の夏は気温だけでなく、湿度も高く、猛暑と蒸し暑さに悩まされました。いわゆる不快指数が高く、辛い日々でした。中東やインドでは、日中の気温が50度に達する日があるようですが、湿度が低いので人間が生活できる環境なのだそうです。

高温多湿の夏は皮膚のトラブルが多く、汗疹・虫刺され・接触性皮膚炎(かぶれ)の患者さんが増えます。私は、エアコンの設定を冷房からドライに変えた方が快適に感じる事がしばしばありました。都会の夏の外気の平均湿度は80%以上です。一方、室内の快適な環境は、室温27度から28度、湿度60%程度なのだそうです。必然的にエアコンを付けますが、外気との差が激しいと自律神経バランスの不調をきたし、夏バテする危険性が高いので要注意です。

さて、街医者の仕事は外来診療以外にも往診と健康診断の推進と実施があります。長く通院されていた患者さんが御高齢となり体調を崩して医者に來れなくなる事があります。このような時は、担当していた医師としても様子を見に行かないと不安になります。患者さんが在宅で回復された場合は勿論のこと、適切な病院に入院する手伝いができた時にはホッとします。

健康診断に関しては、やはり働き盛りの方の検査異常値が極端に高い事が気になります。いわゆるメタボの方のコレステロール高値や糖尿病は全身の動脈硬化を来すので今から気を付けましょう。

新宿中央公園の虫の声を聴きながら、この原稿を書いています。毎年、夏の終わりの蝉の声はなぜか寂しい気配がします。一方で、過ぎやすい秋にはスポーツや観光の楽しみがあります。今年は、秋の高原の景色を楽しみたいと思っています。

院長 

伊藤外科内科医院 HP

<http://www11.ocn.ne.jp/~itoh-hp>

(バックナンバーは HP にて公開中です)



三弓先生の本棚 35

季刊誌『考える人』 特集・はじめて読む聖書

今年の夏は、ちょっと知りたいことがあって、イエス・キリスト及びユダヤ、聖書関連の本数冊と、関連映画のDVD 6本を観た(ちょうどテレビで懐かし『ベン・ハー』をやっていたので、これを入れると7本。チャールトン・ヘストン、やっぱりカッコいい!)

かつて読んで衝撃を受けた『イエスという男』という本の著者・田川健三氏のロングインタビューが掲載されているということで古本で手に入れたのが、今回ご紹介する新潮社刊の季刊誌『考える人』の2010年春号である。この季刊誌はワンテーマの特集形式で、この号は「はじめて読む聖書」という特集が組まれている。「神を信じないクリスチャン」と題した田川氏の24ページにも及ぶインタビューも読みごたえがあったが、ここで紹介したいのは別の記事である。

まず、目を引いたのは、ページのタイトル。「ケセン語訳聖書に取り組む」。著者は山浦玄嗣先生という開業医である。「ケセン語」も山浦先生の名前も、初めて知った。

山浦先生は戦争の真っ只中の1940年、岩手県気仙郡(現・大船渡市)で生まれる。子どもの頃、村でただ一軒のキリスト教徒だったそうだ。本文によると、「村人にとってキリシタンは邪宗門で、大日本帝国はヤソを国賊とし、学校では戦後民主主義の教師たちがキリスト教は資本家が人民を搾取するための悪辣な道具で、人類的だと教えた」と書いている。でも、玄嗣少年はイエスを愛していた。村の人たちに愛すべきイエスを理解してもらうためには、「イエス様の言葉を故郷の言葉に直さないと、その心は伝わらない」、そう思ったという。

それから数十年、医者になった山浦先生は35歳の時に一念発起して、岩手県気仙地方の言葉を「ケセン語」と命名し、25年をかけて『ケセン語大辞典』を作った。これだけでも大事業なのに、ここで山浦先生は思うのである。「やっとならぬケセン語で物を書くペンを手に入れた」と。

ここから「ケセン語訳聖書」の奮闘が始まるのだが、すぐに立ち止まる。聖書の有名な文言のひとつ「心の貧しい人」を、ケセン語でいったいどういったらいいのか……。そこで山浦先生は考えた。これがわからないのは、自分の愚かさもあろうが、それ以前に従来の翻訳が問題なのではないか……。そこで、60歳にして古代ギリシャ語を学び、新約聖書の原典を読み直すところから始めるのである!

知らなかったのだが、こうしてでき上がった「ケセン語訳聖書」は日本中で売れたらしい。ご本人の予想に反して、ケセン語が分からないはずの気仙地方外民からも「わかりやすい聖書」であるという意見が多々届いたという(この翻訳の仕事が評価され、先生は気仙の仲間とともに教皇ヨハネ・パウロ二世に謁見し、「ケセン語訳聖書」を献呈する榮譽を受けられたそうです)。

私もぜひ「ケセン語訳聖書」を読みたいと思い、手始めに2011年の暮れに刊行された文春新書『イエスの言葉—ケセン語訳—』を手に入れた。山浦先生のいる大船渡市も、東日本大震災で甚大な被害を受けた。先生はこの本の一項目に、「その時、町に、人に起こったこと」とともに、イエスの言葉からひとつ選んで記している。忘れてはならないあの震災について、今まで読んだり聞いたりしたなかで、もっとも体温を持って深く心に残る文章だった。

(一弓)